米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く⑨

松尾寺の梵鐘

―戦中秘話・供出から文化財を守れ―

新発見の梵鐘

松尾寺（上丹生）本堂跡背後の曼荼羅堂内に仮安置されていた梵鐘は、高さ一〇二・五センチ（三尺四寸）と中型をやや上回る大きさの梵鐘です。撞木で突く撞座が、釣り環の左右に配置された龍頭（竜の頭のレリーフ）と同方向に配された典型的な和鐘（日本鐘）の形式を踏んでいます。鐘の本体部分の袈裟襷文の中帯の位置を高く取り、縦帯との交点に撞座を配さず、独特の六弁花文を表す点が異例とされます。また、池の間に奏楽天、縦帯に供養菩薩をあらわし、とくに、縦帯に供養菩薩を鋳出しているのはたいへん珍しく、滋賀県内では延宝七年（一六七九）銘の成菩提院鐘（米原市柏原）、天和元年（一六八一）銘の蓮敬寺鐘（長浜市西浅井町大浦）を含めて三例を数えるのみです。

▲松尾寺梵鐘

本鐘は草の間の一～三区に刻銘があり、松尾寺の由来などを記すとともに、本鐘が江戸時代前期の貞享元年（一六八四）に、松尾寺一山の僧侶が願主となり、京都三条釜座の藤原国次によって製作されたことを記しています（成菩提院鐘および蓮敬寺鐘も藤原国次作）。三条釜座は平安時代から鋳物の生産地として知られ、材料の購入・販売・その他の既得権を有する独自の自治的な組織に成長し、近世になると全国に類を見ないほど大きな組織になりました。本鐘の均整の取れた外観や、奏楽天の表現、撞座の蓮華文などにみられる堅実な作風は、三条釜座特有のものです。なおこの鐘は、梵鐘研究の大家として知られ、全国の梵鐘を網羅した坪井良平氏や久保仁平氏のリストに掲載されておらず、梵鐘研究上では新発見の梵鐘です。

梵鐘を守れ！

このように、新発見の梵鐘には米原市の歴史の証人として貴重な記録がとどめられています。しかし、かつて、文化財である梵鐘の約九割が全国で失われてしまいました。戦時中の昭和一六年（一九四一）に公布された「金属類回収令」に基づき、翌年各県が回収実施要綱を定め、民間団体等とも協力して本格的な金属回収が進められました。滋賀県においても昭和一七年以降「不要仏具献納運動」が盛んに進められ、梵鐘などの大型金属類が回収されていきました。県内から「出征」する梵鐘は、応召兵さながらに赤いたすきを掛け、幟を立てて、地域をあげて盛大に見送られました。兵器生産という戦争遂行の直接的な目的のため、先人が生み出し、長年にわたって受け継がれてきた文化遺産を自ら無に帰すという判断が、米原市でも行われました。

そんな中でも、地域の文化財を懸命に守ろうとした人々がいました。県制定の「昭和一七年度第二期金属類特別回収実施要綱」には、「歴史上、美術上、由緒上」保存の必要があるものを供出除外物件とする例外規定がありました。滋賀県文化財保護課には「金属回収除外申請」公文書綴りが保管されています。提出された申請書は三五件。ほとんどの案件が供出除外を認められています。詳細な資料を添えて、所有者や地域から提出された熱意を、当時の県の技師が正面から受け止めた結果です。しかし、国策協力団体などから横槍が入り、県が認可した坂田郡内寺院の梵鐘に対し「地元に於いて反感誠に多い」と、再調査のうえ善処するよう進言書も提出されましたが、認可の決定は覆りませんでした。戦中の国民的熱狂の中で、文化財の大量処分から地域文化財を守った史実を物語る貴重な記録です。

（歴史文化財保護課）